推理小説代表作選集

The mystery annual of Japan 1985

The mystery annual of Japan 1985

江苏工业学院图书馆
藏书章

1985＝推理小説年鑑　推理小説代表作選集

日本推理作家協会編　講談社

1985年版　推理小説年鑑
推理小説代表作選集　定価 1700円

昭和60年5月30日　　第1刷発行

編　者　　日本推理作家協会
発行者　　野　間　惟　道
発行所　　株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21
郵便番号112
電話東京(945)1111
印刷所　　豊国印刷株式会社
製本所　　大製株式会社

© 日本推理作家協会 1985 Printed in Japan
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にておとりかえいたします。

ISBN4-06-114527-4 (0)　(文2)

1985年版　推理小説年鑑

推理小説代表作選集〈目次〉

序……………………山村正夫 5
初代団十郎暗殺事件……………南原幹雄 9
秘められた心中……………夏樹静子 33
死への旅「奥羽本線」……………西村京太郎 73
真夜中の殺意……………大谷羊太郎 103
キッシング・カズン……………陳　舜臣 125
海猫岬……………山村正夫 143
記録された殺人……………岡嶋二人 175

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

領置調書・・・・・・・・・・・・・・石沢英太郎　201
間違い電話・・・・・・・・・・・・・・日下圭介　225
紫陽花夫人・・・・・・・・・・・・・・小泉喜美子　239
宵待草殺人事件・・・・・・・・・・・・近藤富枝　261
鳴神・・・・・・・・・・・・・・・・泡坂妻夫　289
証言・・・・・・・・・・・・・・・・麗　羅　305
ガラスの柩・・・・・・・・・・・・・・皆川博子　327
唯一の証言・・・・・・・・・・・・・・連城三紀彦　339

防衛創・・・・・・・・・・・・・・佐野　洋　361
昭和59年度ミステリー回顧・・・二上洋一　392
SF界一九八四年・・・・・・・・風見　潤　396
受賞リスト・・・・・・・・・・・・・・・・・・400

デザイン　細谷　巌
写　真　木津康夫

序

日本推理作家協会理事長
山村正夫

推理作家協会賞が三部門制に改められてから、もうかなりの年月が経つが、そのうち長編賞は前年度の一月より十二月までに刊行された単行本、短編賞は各雑誌の一月号から十二月号までに掲載された短編を対象に、リスト・アップして選考が行なわれる。

その数は毎年長編が二百冊、短編が五百篇を超える盛況がここ何年来つづき、昨年度は長編二百五十三冊、短編五百六十篇を算えた。短編だけでも月平均、約五十篇近い作品が各誌を賑わせているのだから、驚異というほかはない。推理小説が相変らずエンターティンメントの主流として読者に歓迎されている事実を、如実に物語っているといえるだろう。

そうした繁栄の原因はさまざまな要素が考えられるが、その一因は作風の多様化現象が近年ますます著しく、一般小説からノンフィクションにいたるまで、あらゆるジャンルに進出している点が挙げられる。いま一つはベテラン作家の息長い活躍に加えて、有力な新鋭作家の台頭に負うところが大きい。それらの新勢力によって、とりわけ冒険小説やハードボイルド、パロディー等に、新風をもたらす試みが為されていることは注目に価する。

協会ではそのような推理小説界の現況の鳥瞰に役立つよう、主要事業の一つとして年度別の「推理小説代表作選集」（年鑑）を編纂している。一九八五年版の本書は、郷原宏、権田萬治、多田兼成、中島河太郎、中村利夫、林邦夫、武蔵野次郎の七氏に選考の労を煩らわせた。それらの諸氏の手で数次にわたる委員会が開かれ、五百六十篇から最終的に十六篇を選ぶ困難な作業が進められた。その中には、今年度の協会賞の短編賞候補作五篇もふくまれている。

前にも書いたが、ページ数に制限があるのが毎年の悩みの種で、本書の収録作のみが昨年度の短編の収穫というわけではない。割愛された秀作の方が多く、本当はもっと巻数がないと、異なる作風の作品を網羅することは不可能である。その意味では推理小説界の趨勢の一端しか窺い知れない憾みがあるが、巻末に付した二上洋一氏の「昭和59年度ミステリー回顧」と風見潤氏の「SF界一九八四年」を読んで頂ければ、SFを併せた昨年度の展望を把握して頂くことができると思う。

なおバックナンバーを御希望の読者は、過去の巻が文庫判で逐次刊行されているから、それをぜひお勧めしたい。

一九八五年四月

1985年版　推理小説年鑑

推理小説代表作選集

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

初代団十郎暗殺事件

南原幹雄

狂言は〈二番目〉から〈三番目〉の中入りにさしかかっていた。

市村座の客席はしいんと水を打ったような静けさである。舞台は団十郎と生島新五郎・中川半三郎の三すくみでしのぎをけずり合っている。三者の呼吸は見事に合っている。

台詞と所作による丁々発止の演技がつづいた。そのぴりぴりするような緊迫感が客席につたわって、舞台と客席は一体感につつまれている。

市村座は、昨年（元禄十六年）十一月に火災で燃えおちていらい、三ヵ月ぶりの興行である。今年二月初頭に市村座の普請が落成して、それを祝うために〈移徙十二段〉の新作狂言がくまれた。移徙は新築の意味につうず。仕組は屋島、壇ノ浦の戦いに題材をとっている。

座頭団十郎、立役に生島新五郎、立女方生島大吉の布陣で初日をあけてからというもの、予想どおりの大当りで、客は早朝からつっかけてきた。そして今日で八日めをむかえ、役者も足が板（舞台）になじみだしていた。

団十郎の朗々たる音量が舞台を圧した。団十郎は鞍馬の僧正坊と佐藤嗣信、生島新五郎が佐藤忠信、中川半三郎が牛若の配役である。

新五郎が絶妙の呼吸で団十郎の台詞をうけた。団十郎の顔は紅で隈どられており、新五郎の顔にも筋隈が入っている。

荒事には隈取が必須のものである。これが舞台に効果をあたえ、人物の役柄、性格まで浮き彫りにする。

団十郎は僧正坊の役になりきっていた。中入りを一気にのりきる気魄を内にしずめて、新五郎と応酬をつづけた。

団十郎はのっていた。十四歳で芝居に身を投じ、荒事を創始し、江戸歌舞伎を上方歌舞伎にひけをとらぬ興隆にみちびいて、芸風は円熟の域に一歩をふみ入れている。そして今充実しきっていた。

と、このとき、団十郎はあらぬものを見た。

（……？）

なにかの間違いでは、と一瞬自分の目をうたがった。引幕の陰に役者がいた。

（教経……）

衣装と隈取で平教経だとわかったが、舞台の進行とかかわりのない役者である。

団十郎の演技の間が、客席にはわからぬくらいくるった。それが、新五郎の間にも微妙にあらわれた。

（半六、なにを間違えたか……）

団十郎は肚のうちで叱咤した。教経役は生島半六である。教経は手に短刀を持っている。

おや……、と団十郎はいぶかしんだ。教経が短刀を手にする芝居はないからである。瞬間、惑乱におちいった。そして悪寒をおぼえた。

つぎに驚天動地のことがおこった。教経がこちらにむかって駆けてきた。

客席のざわめきが感じられた。教経が突進してくる。

短刀がにぶくひかった。教経はそれをふりかざして、はげしくぶつかってきた。短刀は本身だ。

団十郎は一二歩さがったが、瞬時の差でよけきれなかった。おもい衝撃をうけ、一瞬、視界が暗闇になった。ひくい声をもらして転倒した。

おきあがろうとしたところに、再度短刀がおそいかかってきた。

「半六っ、やめろ！」

夢中で声をあげ、必死に手で制したが、短刀が力まかせにふりおろされた。血しぶきが舞台にとんだ。

激痛と恐怖におそわれ、懸命に逃げようとした。けれども、体がいうことをきかなかった。

客席の騒ぎも急速に意識から遠いものになっていった。

――元禄十七年（宝永元年）二月十九日、初代市川団十郎は舞台上に横死をとげた。享年四十五であった。

一

八代目団十郎は、一瞬ためらった。

中村座の楽屋風呂で化粧をおとしてもどってきたところに、立作者瀬川如皐がひょいと顔を見せた。如皐にはかねて、さがしものをたのんである。

が、今朝でがけに母親から相談ごとがあるといわれていた。

如皐との話となれば、ちょっとやそっとではおわらない。木場の家にもどるのは夜更けになるだろう。

「八代目、例のはなしだが」

如皐が声をかけてきた。五尺そこそこしかない矮軀で風采はあがらぬが、才能にはめぐまれた男である。

如皐が脚色し、この三月十四日から初演している〈与話情浮名横櫛〉が大当りしているのも、団十郎の人気だけによるものではなかった。市井写実と男女の心理の妙をここころえた如皐の台本に負うところがかなりあった。

「楽屋じゃあなんだから、〈大八〉の座敷にしよう」

とこたえたとき、団十郎のうちからもうためらいはふっ切れていた。

大八は中村座の楽屋口のならびにある芝居茶屋である。中村座にでているときの団十郎一門はほとんどこの茶屋をつかう。

「じゃあ」
といって、如皐はやや猫背で先にでていった。
芝居が閉場て客がでていくと、客席は急に墓場のようなしずけさになるが、大当りの余韻は楽屋や道具部屋などにのこっている。その余韻は茶屋にもちこされる。芝居があたれば、茶屋は大繁昌する。不入りだと、茶屋も死んだようになる。
これは茶屋ばかりでなく、猿若町の食べ物屋や土産物屋などもおなじである。
大八の座敷にとおされると、如皐と風麿が待っていた。風麿は如皐の弟子で、まだ中村座の見習作者だが、身分は旗本の次男坊である。大柄で、筋骨たくましく、容貌さわやかな若者だ。
「わかったかい、何か」
すわるなり、団十郎はものをねだるかのようにいった。
「〈移徙十二段〉てえのは、やっぱり幻の狂言ですよ。今まで以上のことといったら、仕組や趣向、配役はおろか台詞の一本だってわかりませんね。絵入狂言本はもちろん、番付だってのこってないんだから、お手あげですよ」
如皐は初っから打ち手がないといった顔をした。
「幻か……、たしかにそうだ。誰も見たことはないし、台本だって知らないんだからな」
団十郎は相槌をうった。
「あたるべきところはあらかたあたってみたんですがね。手がかりになるようなものは、切れっ端もみつかりませんでしたよ」
「一度この世から消されちまった狂言だから、その正体をさぐるのはむつかしいだろうな」
団十郎は落胆の言葉をもらしつつも、暗い表情は見せなかった。まだ、さぐっていく方法はのこっているはずだという期待をいだいているからだ。
「初代の追善にはもってこいの狂言ですがねえ、仕組の輪郭くらいはわからねえと」
「まだ月日には余裕がある。あきらめないで、もうひと踏んばりあたってみようじゃないか。おれもこころあたりをさぐってみよう」
「わたしもあきらめちゃおりません。きっとどこかに手がかりくらいはのこってるとおもいますよ」
「〈移徙十二段〉をなんとしても、もう一度生きかえらせてやりたい。それには、初代の百五十回忌追善狂言として日の目を見せてやるのがいちばんいいような気がするんだ」
「そりゃあ、それ以上の時宜といってはないでしょう。そのときをのがしたら、わたしや八代目が生きているうちにいい機会なんてめぐってこないでしょう」
今年が初代市川団十郎の百五十回忌にあたる。以前から団十郎は、横死をとげた初代の追善興行をおもいたち、それにもっともふさわしい狂言として〈移徙十二段〉をかんがえていた。

初代団十郎がどうして一座の役者生島半六にころされたか、その動機はわからぬままになっている。と同時に狂言の内容がほとんどつたわっていない。

元禄期ごろまでの狂言は座頭が中心になって口立でつくられたので、台本というものはなかった。そして口から口へつたえられた。そうでないものは当時版行された絵入狂言本や番付、役者評判記によって仕組や配役などを知るほかはないのである。

〈移徙十二段〉は天下未曾有の不祥事をおこした狂言としてその後上演されなかったため、口から口へつたわることはおろか、絵入狂言本としてもつくられなかったと想像することができた。わずかにその内容をつたえるものとして団十郎横死の翌年出版された〈宝永忠信物語〉と享保期の末にだされた〈金の揮〉があるだけだった。この中にいくらか仕組と配役についてふれているところがあった。

それで団十郎は如皐に〈移徙十二段〉についての資料を極力さがさせ、その台本をあらたにつくるよう依頼してあったのだ。如皐は知り合いの版本屋、地本問屋などに手をまわし、番付類や役者評判記をもとめて弟子の風麿をあるきまわらせていたのである。

団十郎も自分の家に代々つたわってきた資料や書簡、文書をひっくりかえしてさがしたが、見つからなかった。彼は百五十回忌を機に、家の先祖であり、江戸歌舞伎の最大功績者として初代を顕彰し、功績を記念しておきたかったのである。

「おれも、こころあたりを虱つぶしにしてみよう」

「とことんやってみましょう」

「追善興行は、盆か秋をかんがえてるんだが」

盆興行か秋興行ということである。団十郎はすでにそこまでかんがえていた。

団十郎は今年は中村座の座頭である。彼がたって主張すれば、座元も帳元も大抵のことはいやといわない。まだ若いが、それくらいの力は、団十郎はもっていた。彼は今、人気絶頂にたっている。美男だけに、とくに婦女からの人気がすさまじかった。

一刻（二時間）ほど三人で酒をのみ、帳場に駕籠をたのんで、夜更けに家にもどった。

家では、母親のおすみが寝ないで待っていた。

市川家の代々の家は深川島田町にあったが、天保十三年七代目団十郎が豪奢な暮しをとがめられて江戸十里四方追放になったとき、取りこわされた。以後、木場にうつっていた。この家に団十郎は七代目の正妻と妾二人、それぞれの生んだ子たちとともに住んでいた。団十郎自身はいまだ独身で、妾もいなかった。

「おそくなっちまって、すいませんでした。話ってのは……」

おすみは七代目団十郎・現海老蔵の正妻である。団十郎はそうたずねたが、おすみの用件は大体予想がついてい

た。

「大坂から手紙がきてるんだよ。この夏、どうしても八代目に大坂へきてほしいって」

海老蔵は四年まえ、追放赦免になり、一度江戸にもどってきたが、昨年、一世一代の名残狂言〈勧進帳〉を河原崎座で演じて、妾のおためとともに大坂へ旅だち、ずっと上方芝居にでている。

「この夏は、初代の追善興行をやるから、上方へなどいってられないんですよ」

団十郎はにべもなくいった。海老蔵は以前から団十郎を上方に呼びたがっていた。

歌舞伎は今江戸のほうが隆盛しているが、はじまったのは上方であり、長い歴史をもっているから、江戸の役者でも一度は上方の舞台にたつべきだという論である。文化芸能は何事も上方でおこって、それが江戸にくだってきた。歌舞伎もその例にもれない。

それは十分にわかっているが、当分は江戸をはなれられない、といって団十郎は父のもとめをことわっていた。

七代目といえば、歴代のうちでも不羈奔放をもって鳴り、華麗な演技で天才と呼ばれた役者である。今にのこる〈歌舞伎十八番〉を制定したのも七代目である。

ところがその海老蔵も寄る年波はあらそえず、ちかごろめっきり弱気になっていた。すでに自分の看板だけでは客を呼びにくくなっていることも知っていた。上方の銀主(江戸の金主)や名代、座本などにたいしても、そう大きな顔ができなくなっているのではないかと団十郎は想像していた。団十郎父子の二枚看板で、一度上方で競演したいとおもっている父の気持には同情がわいた。

そのうえ海老蔵はつましい暮しはけっしてできぬ人である。金はなくても豪奢に振舞う。そのための借金の清算も、ちかごろでは団十郎の肩にかかっていた。

「何はさておいても、道頓堀の舞台にでてくれって、くどいほど書いてある。そのために中の芝居の帳元を江戸へおくるとまでいってるんだよ」

「冗談じゃありません、上方の帳元になどきてもらってはこまります。機会がきたらかならずいくって、返事をおくってください。でも当分は駄目です」

団十郎はきびしくいった。海老蔵のわがままにはもうふりまわされたくないおもいであった。

「納得してくれるだろうかねえ」

おすみには自信がないようだ。

「納得してくれなければこまります」

母親の口を封ずるようにいって、団十郎は自分の部屋にもどった。

二

団十郎の手もとに〈宝永忠信物語〉〈金の揮〉二冊の古

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.